

薬草園をめぐる ⑧

白 瀧 義 明

(城西大学薬学部)

ロウバイ *Chimonanthus praecox* (L.) Link
(ロウバイ科 Calycanthaceae)

冬晴れの1月下旬、まだ花の少ない薬草園を歩いていると、何処からともなく漂ってくる甘酸っぱい香りに辺りを見渡すと、艶のある黄色い花をびっしりつけた木を見つけすることができます。これがロウバイ（蠟梅）です。

ロウバイは主に中国中部に分布する高さ2~4mの落葉低木で、長さ10~20cmの全縁、長楕円形または卵状長楕円形で先の尖った葉をつけます。葉が出る前に直径約2cmの強い芳香のある花をつけますが、多数ある花被片のうち、外側のものは黄色、内側のものは短く紅紫色を呈しています。雄しべは5~6本あり、内側のものは仮雄しべです。また、瘦果は長さ約3.5cmの楕円体の果床に包まれています。ロウバイ属は2~6種からなり、いずれも落葉または常緑低木で、属名も「冬 cheimon」「花 anthos」を意味するギリシャ語に由来しています。ロウバイは英名を winter sweet といいますが、日本へは、17世紀の初めに中国から朝鮮半島経由で渡来したとされ、日本を含む温帯各地で広く栽培されています。

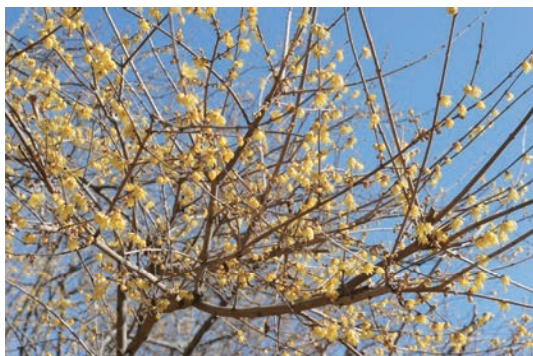
ロウバイの和名は漢名の「蠟梅」の音読みですが、臘月（陰暦12月の異称）にウメに似た香りの花をつけるからとも、花が蜜蠟（ミツバチの巣を加熱・圧縮して採取した蠟で、艶出し剤、化粧品などに利用される）を連想させるからともいわれています。ロウバイには香りが強く、内側の花被片も黄色いソシンロウバイ（素心蠟梅）や花が大きいトウロウバイ（唐蠟梅）などの園芸品種があります。薬用としては、1月中旬ごろ、開花前の花蕾を採取し、風通しの良い場所で、陰干しにしたものを「蠟梅花」といい、熱病煩渴（ネツビョウハンカツ）、



ロウバイ（花）



ソシンロウバイ（花）



ロウバイ（遠景）



マンゲツロウバイ（満月蠟梅）



蠟梅園 (宝登山)

解熱，鎮咳，鎮痛薬として咳嗽，小児麻痺，百日咳，やけどなどに用います。成分については，花蕾に cineol, borneol, linalool, camphor, 種子にアルカロイドの calycanthine などを含み，calycanthine は動物に対して，ストリキニーネ様の作用を示し，ウサギの摘出腸管，子宮に対して興奮作用がみられます。

埼玉県長瀬宝登山（ホドサン）には約 3,000 本のロウバイが栽植されている関東唯一のロケーションを誇る「蠟梅園」があり，縁起の良い山の名前のご利益もあって，早春の良く晴れた日，観光客で賑わいます。